第5号

北國文華

2000 夏

北國新聞社



室生犀星　徳田秋声

所蔵品から見た三文豪

石川近代文学館長　井口哲郎

94

金沢文学散歩　三文豪と島清

詩人　安宅夏夫

104

名作の舞台をたずねて

金沢学院大学助教授　水洞幸夫

116

リレーエッセイ

父の背中　第5回　室生犀星

室生朝子

126

遺伝子と上手につきあう　生命科学の最前線から

東京大学大学院教授　石浦章一

176

金沢方言に見る「方言進化論」　方言は本当に衰退しているのか

金沢大学助教授　加藤和夫

186

泉鏡花と西田幾多郎　明治三十七年鏡花金沢帰郷

松田章一

196

対談

大分・湯布院に温泉地活性化を学ぶ

旅館「亀の井別荘」社長　中谷健太郎
シナリオライター　佐々木守

160



ゆふいん音楽祭

表紙「踊り候え」鴨居玲　作

連載

ひとり芝居「イッセー尾形」の作り方
ベストセラー小説を一週間で書き上げよう

アジアを食べる⑤　望郷のラーメン

メディア・プロデューサー　伊藤武

206

エッセイ

持ち越しの事

古井由吉

224

金沢、ちょっとプルーストふうに

佐々木涼子

226

「青潮文化」と「黒潮文化」

日高旺

229

鴨居玲のこと

吉田冨士夫

231

パリ　日本人飛行クラブ

北川文夫

235

井上靖、怪力乱神を語る

森井道男

238

モクレンの花

青木新門

241

小説

拍子木

金山嘉城

244

法律を叱る　第5回　消費者契約法

弁護士　岩淵正明

218

マスコミ時評

北國新聞社論説委員長　堀喜代治

220

北國文華協賛者／編集室から

は聴いて取れない。これは私自身の耳の、言語感覚の分裂にもかかわる。

今の若い者は、鷗外、漱石はおろか、秋聲ですら、よくよく「勉強」しなくては読めないようになっている、と言われるようになってから久しい。しかし私のような高年者にとっても、明治に生まれ育った文人たちとの間に、同じ近代口語を使っていても、言語上の断層はある、ということを知るべきなのだろう。時間の表わし方、感受の仕方に、差があるようなのだ。時間の弁別と整合を重んずる西洋の文法の洗礼が、われわれ現代の人間の言語感覚に、先人たちよりも深く染みている。



古井　由吉（ふるい　よしきち）
昭和十二年東京都生まれ。東京大学文学部独文科卒業。金沢大学、立教大学で教鞭を執る。『木曜日に』『雪の下の蟹』などで注目され、『杳子』で芥川賞を受賞。以後、『栖』（日本文学大賞）、『槿』（谷崎潤一郎賞）、『中山坂』（川端康成賞）などがある。

金沢、ちょっとプルーストふうに

佐々木涼子

この三月、久方ぶりに金沢を訪れた。久方ぶりだとは思っていたが、よくよく数えてみたら、なんと二十四年ぶりだった。

日頃、略歴にもパスポートにも麗々しく「金沢生まれ」と書いている。すると、それを見て顔を輝かせ「おや、金沢生まれなんですか」と言う人がいる。東京の人間にとって、金沢というところは、何というか、ちょっとおしゃれな土地なのである。で、私も得意になって金沢の自慢をしたりする。しかし、気がついてみたら、もう二十四年も遠ざかっていたのだった。申し訳ないような話である。

子どものころは毎年、夏休みになると金沢へ行った。母の家が金沢に、父の家が七尾にあったので、子どもたちの学校が休みになると両親が里帰りをしたのである。どちらの家も自分の家のように隅々まで知り抜いていて、でも夏休み中ではあるし、日頃なじみのない珍しいことはいろいろ起こるし、金沢や七尾での毎日は、すべての印象がひときわ鮮やかに感じられたものだ。それはちょうどプルーストのコンブレーみたいで、大学三年の時に『失われた時を求めて』を読み始めた私は、そのへんでとても同感するものがあった。

たとえば第一巻の『スワン家のほうへ』で、復活祭の前の週に主人公の一家がパリから休暇を過ごしに訪れるとき、汽車の窓に見えてくるコンブレーの町は、はじめは一つの教会の尖塔でしかない、などという件りを読むと、私も汽車で金沢に行くときのことを思い出すのである。私にとっては、北陸に近づいたという徴は、家々の濡れ濡れと黒く光る瓦である。最初にそれが見えると、瞬間、雨が降っているのかな、と思う。それから、そうだった、これが北陸だ、と思い至るのである。

古い家の、薄暗い片隅。昼のあいだはすっかり忘れていて、夜になると急に怖くなったり寂しくなったりするのも、子どもなればこそ、旅行中なればこそだ。私が卒論のテーマにプルーストを選んで、そして結局一生つき合うようになったのも、夏ごとの北陸行きがプルーストを読む時の下敷きになっていたせいではないかと思う。

しかしいつからか、私は金沢に行かなくなった。四人の祖父母が亡くなり、私自身がおとなになって自分自身の行動をするようになったからだ。法事や祝い事で、北陸に行く機会はないことはなかったが、それもだんだんに間遠になった。別段ふしぎなことではない。生活というのはけっこう事柄が詰まっていて、たった数日の旅行でも、なかなか余裕の出ないものではないだろうか。

それでも私にとって金沢は少しも遠くに思えなかった。両親を通じて、あちこちの噂がしょっちゅう聞こえてきたし、風景だって忘れようもなく頭にこびりついていた。それから少し身を離して、風通しをよくしたいというくらいのものであった。そんな感じでいるうちに、いつのまにか二十四年がたってしまったのだった。

二十四年ぶりに金沢駅に降り立って、まず驚嘆したのは駅前の風景だ。まったく変わってしまって、まるで見覚えのない外国の街のようだ。とても金沢とは思えない。それからが戸惑いと手探りの連続だった。街のようす

も、記憶にあるものとすっかり違っている。昔はどうだったっけ。そう思って、目をつぶって記憶を掘り返すと、イメージが出てくることと、かえって分からなくなってしまうこととある。なんだか、とても地盤のあやふやな土地を歩いているような、心もとない気分だった。

だが一番ショックだったのは、道に迷ってうちに帰れなかったことだ。「うち」というのは昔の祖父母の家で、今は八十を過ぎた伯母が元気に一人で住んでいる。子どもの頃の私にとって金沢は、その家を中心に、ほんの小さな半径の円に収まるほどのものだった。その円のなかに入れば、うちへは目をつぶっても行けると、そう信じていた。

ところが道に迷ってしまったのだ。どうにもならなくなって、通りすがりの人に尋ねた。悔しいかぎりだった。

それなのに、二度目にまた間違えたのである。目をつぶっても辿れるはずの道を右へ曲がって左へ曲がる、その間隔があまり短かったのと、狭い小路が様変わりして道のように見えなかったのと両方で、つい通り過ぎてしまったのだ。子どもの時にはもっとずっと遠くて、もっとずっと広いような気がしたのに…、そう思ったら、子どもの自分が見えてきて、くすぐったい感じでうれしかった。

そして三度目、ついに間違えずにうちに着いた。周囲の家はほとんど建て変わっているけれど、ちゃんと歩けてみたら、なんのことはない、昔と同じ道だった。このあたり、昔と同じだねえ、満足してそう伯母に言ったら、伯母は当たり前だという顔をして、

「ふうん、そうやあ」

と言った。



佐々木　涼子（ささき　りょうこ）
昭和十九年作家・杉森久英氏の長女として金沢市で生まれる。東京大学仏文科卒業。現在、東京女子大学教授。専門はマルセル・プルースト研究と舞踊論。新聞、雑誌にバレエと日本舞踊に関する舞踊論を執筆、舞踊を通じて比較文化を考察中。主な著書に『ロマネスク誕生』『世界のバレエを見てまわる』など。